“生体実験”で博士号

● 大阪府保険医協会

竹内治一

たけうち　じいち

1926年岡山県生まれ。55年大阪医科大学卒。56年同耳鼻咽喉科学教室入局。60年医学博士の学位取得。62年摂津市にて耳鼻咽喉科開業。68年大阪府保険医協会理事。80年摂津市医師会会長。83年大阪府保険医協会副理事長。84年日本医師会代議員。
著書『私説美作略史』小説『朝霧山に川は流れて　赤い夕陽と黒い大地』など

“生体実験”の数々

731部隊の罪行は広く知られているが、これに新たな展開を示したのは昭和56年（1981年）10月16日号の新たに発覚した“生体実験”を報じた毎日新聞夕刊の記事である。またアメリカに渡された膨大な731部隊実験資料も、実は既に1950年代後半にこっそり日本に返還済みであることも1986年9月、アメリカ議会下院復員軍人委補償問題小委員会公聴会でハッチャー国防総省記録管理部長の証言で明らかになった。現在その文書は防衛庁防衛研修所戦史資料室にあり、防衛庁はわれわれの公開要求に対し頑なに拒否し続けている。

この秘密文書の一部が市中に流れた。井上義弘というかつて731部隊に関係し、毒ガスの専門家の軍医中佐が密かにこの秘密文書の一部を借り出していた。その後、彼は突然死亡、秘密文書だとは知らぬ家族がそれを屑屋にチリ紙交換で払い下げ、屑屋は文書の格好のものを神田の古書店に売った。それを慶応義塾大学の731部隊研究者が見つけ、その後、出版したのである。このなかで池田苗夫の名のある論文が6つある。そのほかこの文書の冒頭にある“きい弾”という毒ガス弾（イペリット、ルイサイトガス、黄色ガス）を発射、人体被爆実験記録の論文は無署名だが、表紙に「池田少佐担当」と墨書してある。これは池田自身は否定している（他の6つは肯定）。これらの実験は、多くは731部隊本部のあるハルビン市平房から北西へ200キロ以上離れた安達で行われたようである。ここは360度見回しても人家はおろか山も丘も一つも見えない大平原である。このような人里離れたところなら、伝染すれば極めて危険なペスト・炭疽菌や毒ガスをまきちらしても構わぬということであろうが、“生体実験”ともども他民族を強く蔑視する考えの表れであり、ナチスなどと同様のファシスト特有の思想である。だがここには今は建物の基礎だけで記録・資料の類は、なにも残っていない。

ハバロフスクにおけるソ連の日本人戦犯裁判記録（1949年）では、吉村寿人の凍傷研究の“生体実験”が述べられているが、そのほか、北野政次軍医少将が山田乙三関東軍総司令官に1944年11月にペスト蚤（班長　田中英雄）“生体実験”の有効性を報告している。安達での実験は丸太棒に被実験者（731部隊では“マルタ”と呼んだ）を縛り付け、“マルタ”には鉄帽をかぶせ、布団でまいて細菌あ

るいは毒ガス爆弾での爆発力・破片で傷つかぬようにしてペスト菌の感染実験や毒ガス被爆実験をしたという元731部隊員の越定男（運転手）の証言がある。

北野の“生体実験”は本多勝一が調べ、本人にも確かめているが本人は否定も肯定もせず、満州医科大学在任中に発疹チフスワクチン製造に関して“生体実験”を行っている。

池田苗夫の破傷風実験は中国人関成和の著書に“生体実験”が書かれ、全員が死亡している。“生体実験”常習者の北野が上官で、学問的指導者でもあったので池田が“生体実験”に陥るのは当然で、学問的にはこれ以上確かな実験結果はないということか。

撫順戦犯管理所における田村良雄、秦正の供述（いずれも1954年）はペスト菌、炭疽菌の“生体実験”を安達実験場で行ったことを述べている。

流行性出血熱における“生体実験”

大阪府保険医協会の機関紙「大阪保険医新聞」などに1963年ころから盛んに投書する会員がいた。大阪市で開業し池田苗夫（故人）という。軍医時代の経験というその内容は、

①流行性出血熱の症状：日本にはないが当時関東軍内で大流行し、深刻な問題であった。

②保存血液について：どのくらい古い血液まで輸血可能か。採血後18日が限度だという。

③平和と戦争の医療：戦争の進行と共に物資は欠乏したが日本軍の治療成績はよかった。

④異型輸血の危険：100cc の異型輸血を種々行い全身症状を克明に調査している。

⑤皮膚科学の過去、現在、将来：流行性出血熱死亡者臓器濾液で抗原抗体反応を診る。

現在は中国医科大学として使われている旧満州医科大学基礎医学館を、才越教授（左端）と呂超教授（右端）の案内で見学する竹内夫妻（2002年5月5日撮影）

⑥戦線の医療の成績：医師が無菌的状態を保ち得るなら治療成績はよくなる。

⑦人癌の免疫療法は可能か：下顎癌患者から血液20cc 採取し2%クエン酸を加え注射、著効。

⑧岡本教授の業績を讃える：731部隊員であった岡本氏の実験的糖尿の業績を讃えている。

以上は調査して発見された44文章のほんの一部であるが、投書された当時731部隊に対する知識が乏しく、これらの投書が731部隊と関連があるとは想像もできなかった。

知られているように、3,000人内外の“生体実験”を行ったとされる731部隊員は膨大な実験データをアメリカ軍に渡すことで石井四郎以下の多数の軍医・医学者たちは戦犯を免責された。しかしあえて言うなら、医師たちが“生体実験”をしたという事実は消えない。“戦時中だからやむを得なかった”との言い分で、いつまでもどこまでも許されるものなのか。

また、アメリカのやり方も納得できない。アメリカB29の乗員を“生体解剖”した九大

関係者の多くは死刑にした。もし、731部隊の生体被実験者のなかにアメリカ人がいたら、戦犯免責などしなかっただろう。ソ連・中国の証拠ある猛反対を押し切って免責はなされた。アメリカは戦犯免責を正当化するためか、ソ連の裁判報告はフレームアップだというが、731部隊資料を詳細に調べたアメリカのヒルレポート（毒ガス弾など＝1947年）やフェルレポート（ペスト菌など＝1947年）はソ連の裁判報告を正確に裏付けており、まことに皮肉な結果となった。

池田苗夫はどんな経歴か

本人は1990（平成2）年88歳で死亡しているので、89（平成元）年版の日本医籍年鑑や自ら新聞記者に語った経歴などによると、1902（明治35）年滋賀県生まれ。29（昭和4）年新潟医科大学卒。30（昭和5）年軍医、中国各地、日本内地で勤務。戦後大阪市生野区で58（昭和33）年開業。59（昭和34）年新潟医科大学で論文「流行性出血熱の臨床的研究」にて医学博士の学位受領となっている。

ここで注意すべきは、医大卒後軍医になるまでの1年近く大学でどこに在籍していたか。その後の経歴から恐らく細菌学教室にいたのであろう。軍医歴の中では、731部隊勤務とは言っていないが、研究所勤務が731部隊勤務であろう。医籍年鑑での学位論文の題名から“満州における”を削除している。丸15年間の軍医生活で敗戦時には軍医中佐であった。

1938年ころから、旧満州東部、北部ソ満国境地帯（当時の名称）に駐屯する関東軍兵士に発熱、発疹、全身性出血を伴い、腎臓、肝臓を患う奇病が大流行した。北野、池田らの論文では16%という高い死亡率で、1945年までに、軍の極端な秘密主義から正確な数値はつかめないが、罹患兵士は10万人は下らないという。平均60万人ほどの関東軍にとってはこれは治安・国防上の大問題であった。軍医たちはこの奇病を猩紅熱とか発疹チフスなどと診断していたが、明らかにそれらとは違う、従来の日本にはない伝染病だろうということになった。臨床医しかいない隊つき軍医や陸軍病院では原因が突き止められないとして、細菌、病理、生理、衛生、動物などの基礎医学者の多い731部隊に原因究明の命令があった。

731部隊大連支部長の安東洪次（細菌学、1919年東大卒、戦後東大教授）が調査班長となった。1938年から満州医大微生物学教授で、1942年軍医大佐として731部隊に移った北野政次（1920年東大卒）は、この調査の総括的責任者であったようである。彼はまもなく731部隊長となり、軍医少将に昇進した。この調査には池田苗夫軍医少佐も参加した。

流行地は、池田らの論文によると、北から法別拉（第14国境守備隊）、山神府（第57師団）、孫呉（第1師団、第5国境守備隊）、虎林（第11師団、第4国境守備隊）、東安（第24師団）、林口（第25師団）、八面通（第8師団）、二道崗（第12師団、第1、第2国境守備隊）、牡丹江（第9師団）などの地区である。恐らくその調査の必要から、梅津美治郎関東軍総司令官（1939年9月～1944年7月）の命令により、流行地にハルビン731部隊の支隊として孫呉に673部隊、林口に162部隊、牡丹江（海林）に643部隊を設け、別にハイラルにも543部隊を設けた。調査隊は、(イ)起炎菌の特定　(ロ)感染経路　(ハ)特徴的症状と検査値　(ニ)

死亡率、などを調査した。

調査は長期間にわたって行われ、本症は在来の日本には存在しない伝染病であり、起炎菌はヴィルスであり、セスジネズミに寄生するトゲダニが媒介することを発見した。これによって731部隊員の技師たちや軍医たちは多くの論文を執筆した。

病名は流行性出血熱（Epidemie Haemorrhagic Fevern）と命名された。Epidemicaとは石井四郎部隊長が命名したと池田苗夫はいうが、真偽のほどは分からない。

ヴィルスと特定したのは、北野政次の論文「流行性出血熱に関する研究」の中でヴィルス班（笠原四郎班長）の作業でシャンペランL2、L3の濾過器を通過し、さらにシャンペランL5、L9、そしてザイツＥＫを容易に通過しうる濾過性病原体、すなわちヴィルスだと断定している。だがヴィルスらしいと分かっても、果たしてそれが流行性出血熱の病原菌なのか、をさらにはっきり確かめるには臨床的な人体実験をしなければならない。北野政次はこの点でもぬかりなく、部下の池田苗夫少佐らに命じ、“生体実験”をやらせているのである。そのことを記したのが池田苗夫の「流行性出血熱のシラミ、ノミによる感染実験」その他である。池田は日本軍兵士の流行性出血熱に罹患したものにシラミ、ノミをたからせ、吸血させたものを中国人労働者にたからせ発病させている。さらに新聞記者に問われて、罹患日本軍兵士の血液やヴィルス（シャンペラン濾過液のことか？）を中国人に注射している（毎日新聞夕刊1981（昭和56）年10月16日）。このように“生体実験”の実施をはっきり書いたりしゃべっているのである。

731部隊が生体実験をした「安達実験場」（2002年5月2日撮影）

戦後“生体実験”論文で学位

池田苗夫の学位論文は既述したように、日本医籍年鑑では「流行性出血熱の臨床的研究」と書いているが、これは意図的な改変ではないだろうか。新潟大学医学部で調べたところでは「満州における流行性出血熱の臨床的研究」となっていることは既に述べた。731部隊への批判がハバロフスク裁判記録の出版などでようやく高まりつつあったことへの配慮か。

学制の変更に伴い、旧制医学部の学位授与は1960年で締め切られた。いまから思えば新制であろうと旧制であろうと学位の価値に変わりはないと思うが、新制になれば大学院修了者以外は極めて取りにくくなると噂され、大学院修了者以外の学位申請が殺到した。また論文は必ず専門学会に発表済みで、然るべき権威ある雑誌に掲載することなどが恒例通り義務づけられていた。そこでこのとき医学雑誌への論文投稿は空前の数になり、各専門雑誌とも“汗牛充棟”で雑誌のページ数を増やしたり、臨時増刊を次々に発行した。なか

には学位審査期日に間に合わない例が多数出て、各大学とも審査期日後一年以内に掲載すればよいとの例外規定を設け対処した。池田論文も学位授与は1959年11月で、雑誌掲載は翌年1960年3月である。こういう事態になると、混雑に紛れて随分いい加減な論文が無きにしもあらずであった。筆者は池田論文がいい加減だとは言わない。しかし、いろいろ問題点があるのは事実だ。

イ　題名と所属について

“満州における”という形容は地名を表しているつもりであろうが、大いに問題である。中国では、辛亥革命（1922年）で清朝を倒して中華民国となって以来、“満州”という地名は使わない。東北三省である。1931年、日本が侵略して占領し勝手に清朝時代の古い名“満州”とあえて呼んでいたのであって、敗戦後もこれを使うなら一定の注釈が必要である。

所属と身分についても、元がついているとはいえ、そして、アメリカが戦犯免責をしていても、ソ連（今のロシア）、中国もそして世界の多くの国々が国際法違反の大量“生体実験”をした組織として糾弾しているものである以上、これもまた慎重な注釈が必要である。

ロ　内容について

全体でＢ５版15枚（図表とも）の論文である。8名の重症例と２名の死亡例を記載した症例報告である。実に簡単なもの。文献として挙げてある指導者の北野政次の「流行性出血熱に関する研究」は大変立派な論文である。10章18節の内容は実に系統的で内容が豊富である。第30回満州医学会（1943年）の特別講演である。多くのパートの部下を督励し、“生体実験”までやらせて年月をかけての調査・研究結果の集大成である。池田論文で北野論文を参考文献としているからには、その内容をダイジェストして総論としてつけておけば、彼の症例報告が学位論文としては生きてくるであろう。“生体実験”が基本になければ評価できる。

ハ　問題は

このような“生体実験”が読み取れるような内容のものを学会雑誌が戦後15年もしてから安易に受け入れ、そして大学の学位審査を容易にパスさせているところに日本の医学界の抜き難い保守性と、侵略戦争への無反省が責められるべきと思う。

ニ　学位審査に学閥の影響はなかったか

新潟医学専門学校は1910（明治43）年開校した。東大を1905（明治38）年に卒業した川北元三が細菌、衛生、医化学教授で着任。1908（明治41）年東大を卒業した宮路重嗣が1914（大正3）年新潟医専に川北の後任第二代教授として着任し、彼は細菌・衛生学を講じた。1922（大正11）年新潟医専は医科大学に昇格。かくして新潟医科大学の細菌学教室は実質上東大細菌学教室の植民地となり後に北野に池田の学位取得での介入を許すことになった。

北野政次は1920（大正9）年東大を卒業し、直ちに東大細菌学教室に入った。第三代新潟医大細菌学教授となる伊藤泰一は1922（大正11）年新潟医専を卒業し、この年大学に昇格した新潟医大に入り直し、1926（大正15）年卒業して直ちに母校の細菌学教室に入った。

1929（昭和4）年新潟医大は、細菌学と衛生学が分離し、宮路教授は細菌学専任となった。このとき伊藤泰一は細菌学助教授となった。注目すべきは池田苗夫はこの年新潟医大を卒業し、直ちに細菌学教室に入ったと思われるが彼は翌年軍医となった。かくして宮路、北野、伊藤、池田ら4人の人間関係が東大閥を軸にしっかり結ばれ、戦後池田が学位を得る絆となる。

医師の反省は必要ないのか

最近731部隊のことも次々新事実が発見され、その調査も進んできている。だが、これだけの事実が判明しても、それらはほとんど医師の手によるものではない。医師はなぜこれらの事実から目をそらそうとするのか。歴史的事実を自らの手で明らかにするのは“自虐的”史観なのか。われわれは早くこの閉鎖現象を打ち破り、新しい立場に立つべきではないのか。

ドイツ医師会が、ナチスの大量虐殺に協力したことに対し、1989年に「反省声明」を出したようなことがなぜ日本の医学・医療界でできないのか。

文　献

1)池田苗夫　満州における流行性出血熱の臨床的研究　新潟医学会雑誌74の3　1960

2)池田苗夫　流行性出血熱の流行学的調査研究　日本伝染病学会雑誌41の9　1967

3)池田苗夫　流行性出血熱のシラミ、ノミによる感染実験　日本伝染病学会雑誌42の5　1968

4)池田苗夫・楠本健二　満州ニ於ケル流行性出血熱ノ発生並ニ分布（其ノ三）昭和18年発表「731部隊作成資料」田中　明・松村高夫編　不二書房出版　1991

5)毎日新聞夕刊　昭和56年10月16日号　第一面と社会面　1981

6)北野政次　流行性出血熱に関する研究　満州医学雑誌　第40巻第2号　1944

7)ハル・ゴーメルド　証言・731部隊の真相　廣済堂出版　1997

8)常石敬一　医学者たちの組織犯罪　朝日新聞社　1999

9)朝軒富三・常石敬一　奇病流行性出血熱　新潮社　1985

10)本多勝一　中国の旅　朝日新聞社　1981

11)山田清三郎　細菌戦軍事裁判　真樹社　1981

12)C.プロス／G.アリ編　林　功三訳　風行社　1993